



論說

寒月照梅花

月耀如晴雪、梅花似照星、是れ菅公が一千
年の昔に詠出する所恰も今茲の御題に合へ
り此詩菅公が總角の時の詠に係る而して其
平生梅花を愛せしは東風吹かばの一首之を
證す夫れ梅は百花の魁たり清香凜として嚴
冬の霜に傲る冰心玉骨恍として塵寰のもの
にあらず而して清節菅公の如き君子にして
之を愛す誠に偶然にあらざるを覺ゆ梅に取
る所は其風韻氣節にあり更に其花實兼備に
あり此等の點に關しては櫻は遂に梅の敵に
あらず抑々梅は我邦の特有にあらざる憾あ
り又其花の豊艶の態に乏しき故を以て遂に
梅を貶して櫻を揚げて以て百花の王となし大
和魂の象徴となすに至れりされど熟々思ふ
に櫻を以て百花の王となすは即ち可之を以
て大和魂の表彰となすは聊か考慮を要する
に似たり蓋し本居翁の詠の如きは我大和民
族の純粹無雜なる心狀を歌ひしものなれば
毫も批議すべきを見ず只彼の花は櫻に人は
武士なる諺に至りては動もすれば世人の

解を招き華に就き實を忘るゝ弊窟に陥る事
なきを保せず蓋此語は武士の人中の魯なる
を云ふと共に其最後の美しきを頌するもの
なり武士の最後の美しきは最も賞揚すべき
事なれ共只夫れ最後の美を欲し之を得るに
急なるが爲に前後の思慮を缺き計畫を誤り
一身を潔くして他を顧みざるが如きに至り
ては弊も亦甚しと云ふべし古來此最後の美
名に迷ひて後圖をなすに違あらざりしもの
果して幾何ぞや之れ或は櫻花を以て理想と
し標的となすの弊にあらざるなきか所謂眞
の武士なるものは俗語にも云へるが如く花
も實も兼備せざる可からず櫻は實あるも猶
無きが如し梅の實の堅實世を益するに若か
じ予輩は是に於て謂はんとす我國民の理想
としては宜しく櫻を斥けて梅を取るべしと
此の如くにして剛健質實の國民性を養ふに
於て幾分の裨補あるを信するものなり今茲
の御題如何なる歎慮ありや草莽の知る所に
あらず唯梅花に因みて一言するのみ

報 德(河野)

尊德翁は稀世の偉人至誠勤勞分度推讓を以
て身を修め民を導き惡を懲すに德を以てし

人心の荒蕪を起す至らざるなし畢世の覺悟
として詠せられたる歌に「かりの身をもと
のあるじにかし渡し民安かれ願ふ此の身
ぞ」とあり自分の身は天理自然に委し身を
賭して民の爲めに盡すと云ふ赤心を三十一
文字に表はされたるなり翁の一世は實に此
の三十一文字の實行なり翁逝きて既に久し
此の道の徒盡くるなし眞理は永遠に没せず
天理に順ひて播きたる種子は芽を生じ葉を
出し根を生じ枝を生じ花を咲き實を結び永
遠に子孫を後世に傳へ滅する處極まる處な
し凡る此の世に生を保つ自から保つに非ず
之れ翁が報德の依て起る所なり宇宙の萬物
相依り相助けて其の生存を全ふす昔天然物
を採り食とし衣とし住とせるとき天地は既
に木を生じ實を結び之れを能へたるに非ず
や天若し温を與へず光を能へず寒暑乾濕宜
敷きを得ずんば何ぞ果を結ばんや尙進んで
人類社會を爲すのときに於てや分業は起り
各々一人にて全き生活をなす能はず得る所
を交換して生存を全ふするに至るや相依り
相助くるの關係益々密接となる此に於てか
各人は圓滿なる交際をなし眞面目なる生涯
を送る爲め相互感情を和ぐ以て其の存在を

明治四十三年十二月二十五日印刷
明治四十三年十二月二十七日發行
編纂發行人 安井正夫
長野縣西筑摩郡碓氷町四〇四番地
長野縣松本市本町百八拾四番地
印刷者 兎澤忠雄
全縣全 市全 番地
印刷所 交文社
發行所 長野縣立校友會雜誌部
木曾山林學校

○本誌目次

- 論說。寒月照梅花、報德論、學術。カンケンエー式伐木器械
- 山崩ト森林ノ關係、一樹一木、
- 拔草。林業年中行事、森林害虫
- 編隊、曲木椅子製作ニ關スル實
- 驗、●文苑。年末年始所感、冬
- 籠日記、小品、和歌、學校及寄
- 宿舎便り、報告、

全ふせざる可からず此の時に當りて推讓の精神一度去つて求むる能はざるに至らんか此に社會は修羅道となり弱者は強者に貧者は富者に困められ社會の存在一日も安きを待たず翁は門弟に推讓の徳を説くや至れり即ち曰く吾道は分限を守るを本とし分内を譲るを以て仁となすと至言なるかな又曰く入るは出でたるもの歸るなり來るは押し譲るは出でたるもの入るなりと勤めれば反働あり之れ物理學上の原則なり因果報應之れ生きとし生けるものに必ずある可きの原理なり惡因惡果善因善果宇宙天理自然は永遠に此の真理を反復す惡が榮へ善が衰ふ是れを人世の暗黒面に畫かれたる一事柄とせよ假の身を假に宿したる現世に於て人世僅五古來稀なる短時日或はこの跣跡に會ふやもしらねども茲に永遠に滅せざる子孫を殘すに非ずや其の血液は長く此の世に残され何時かは天理の是正する聲を聞くにあらざるや天の明決して永遠に善を葬り惡に組するごとなし是れ天の天たる理由自然の道ならざる所也茲に於てか他利は自利となり讓はざる所なりしかも眞意味に於ける自利得とな得人若し荒蕪を拓き耕作するに當り其の心社會の衣食を作るにありときは此處に眞意味に於ける自利の存するなり若し他利を願て自利事とするや他人も又彼れに向ひて一毫の顧をなすなく生存の眞意味を失ふに至る謹む可きことなり蓋し分業に依り生存する世の中に孤立して生を保つ能はざればはり翁は又天理と人道とを説きて至れり天理は善惡なし只古の聖人君子は人の此世に處するに當り圓滿滑達なる樂土たらしめんと欲し人の爲す可き道即ち人世の目的に對して最も都合良きものを善とし之れに反對するものを惡とす故人間界を離るるとき

學術

ガンケエー式伐木器械

伐木器具は從來斧或は鋸に限定せられたるも近時多くは動力を應用して種々新式の機械の案出せらるる者多し客月發刊の澳國林業雜誌の記述せる者の大要を掲げんに本機は伯林「ハイデー」街五十二番「フウー」ガングエー氏の發明に係る者にして要は細き鋼線線或動力によりて急速力を以て前後左右に運動せしむるにあり恰も蒸して其運動の急劇なる爲め鋼線は熱せられ白煙を擧げ從ひて木材の断面は一部炭化するに至る發明者の言によれば機械の單なる爲め何人も信を措かざる者あれども實驗の結果を見て効力の偉大なるに驚嘆すべしと云ふ即直徑一「ミルメーター」長さ一米突餘の鋼線線の兩端は固く錠様の者によりて長き鐵索に連結し而して鐵索の兩端は重量輕き移動式機關に接続せり鋼線は速度極めて早く即ち一分間に千五百有餘回運動

山崩と森林との關係

洋れ國家至大の患愛にして生民至痛の禍害なるもの未だ會て天災事變より甚だしもの

あらず其來るや突如として不測に起り其襲ふや烈如として猛威を逞ふす曰く天災中山岳地の崩流は誠恐るべき地變也此災變たるや地表の生産物は鳥有に歸せられ其地肉は裂かれ地骨は破られて再び容易に利用し能ざるの不生産地に化せしむ況んや其損害は只崩壞の局部に限らずして崩壞土石雨水と共に流逸し之が爲に及ぼす損害の區域は極めて廣く加之往々劇烈慘鼻の大災を免かれず之れ山間村落に於て常に山嘯と稱して不測の災害を生ずるは間々見聞する所也彼の往年大和國吉野郡十津川郷に於けるが如く山岳崩壞の爲めに郷内一村の全部を悲惨の極に達せしめ終に先祖傳來墳墓の居所を捨てて遠く北海道に移住するの餘儀なき不幸に陥らしめたるが如き或は明治三十年美濃國郡上郡に於て山嶽崩流の爲め其の地方三郡に渉れる人畜財産を損害せしめたる如く此等は輒近に於ける慘中の慘を極めたる實例なり尙又我が信州に於ける實例として弘化四年三月廿四日著名なる善光寺地震の爲め土水内郡虚空藏山の一部分犀川に崩出し水路を杜塞し下流一滴の水を見ざる日間此際上流の水量頗る増加し山間數村の部落を溺没し上流一大帯一長湖を現出す越て四月十三日に至り爆然異響の聲を聞くや忽焉として填塞の土石決潰破烈し洪水一時に暴溢急瀉し其水勢猛烈にして巨石を流し濁流氾濫四方に横流して千曲川に注ぎ之が爲めに犀川及千曲川沿岸の村落は勿論兩川中間の平地一般其浸水を蒙らざるはなく降て元治元年に至り大雨の爲め出水に非常の大洪水ありて何れも地方遠近に非常の慘狀を及ぼし多數の人畜財産を失ひたりと云ふ更に最近に於ける明治二十九年全三十九年及全四十三年中犀川其他諸川の出水の如きは近年稀れに觀る大洪水なり即ち最低地

の水高二十尺餘の増水にして水勢猛烈を極め俄然各所の橋梁を墜落し激流岩礫を逞ふし轟然要所の堤防を決潰す爲めに沿岸諸村の田圃桑園悉く濁浪の浸水を受けざるなく尙進んで道路を破壊し人畜生命を困殺せしむる如き其慘狀實に名狀すべからず却説此等出水崩壞の原因元より降雨多量の與りて出水のあることは何人も疑ひなき所なれども洪水汎濫の被害を劇甚ならしむるものは畢竟山岳崩壞の爲め土石流出して河底を高めらるる結果亦一大原因ならずや然らば山嶽地に於ける土砂崩壞の虞ある箇所に對しては之が研究調査を遂げ以て其救濟根治の實を期するは治水上最も有利なることならん今從來各地に於ける山岳崩流の由て來る實況を見聞するに該崩流は降雨の多少土地の性質地勢の關係地表の状態に於ける四種の要素に依るなり而して降雨の多少は氣壓の變差に由るべき天災にして元より避くべからざる者又土地の性質及地勢の關係に至りては先天的固有に屬するものなるに之れ人事の克く避くべからざるものなるも其地表の状態に至りては人事の作用によりて支配し得べく加之降雨と土地との中間に處して兩者の調和を計り山岳崩壞を左右し洪水被害を消長すべき有力なる關係を保つものなり故に其の地表物として森林を以て掩はるるに於ては降雨の三割以上を其の枝葉に抑留して一部は之を蒸發し一部は点滴林中に降下すべく又其の樹下に降下せる雨水は落葉蘇苔等により土壌の打撃を防ぎ且つ此等林内地表物は常に多量の雨水を吸収して以て土層に浸透せしめ地表雨水の暴流を防ぎ加ふるに網羅盤錯せる樹根は克く雨水の集合流下を妨げ土地の結合力を確實にし岩石の固着力を保持せしむるが故に其の山岳土地を封鎖し土地流出を防遏する

有力なる關係を具ふるに於て然らば河川上流に於ける高山を初め急傾せる山腹地は勿論其の土壤岩石の脆弱にして動もすれば剝離し易く加ふるに常に降雨猛注を受け易き個所等の所謂絶對的森林地に對しては他の利用を避け不合理の經營を加へず適當合理の森林作業に従はざるべからず尙山岳地崩壞の虞ある個所に對する根治の一策として左記の事項に留意するも亦可ならんや

- 一、區域廣き燒畑切替畑等の如き裸地となすは絶對に禁止せざるべからず
- 一、一時に多大の面積に亘る森林の皆伐を禁止し低度の擇伐法に従はざるべからず
- 一、造林地拵等の爲め皆伐の止むを得ざる場合に於ても適度の間隔を計り山腹を纏ふ帶狀の森林を保存せざるべからず
- 一、急傾地植樹地の下刈及地拵等は主幼木の周圍に限らざるべからず
- 一、嘗て崩壞せる痕跡地の内部及四周に生存せる草木は一切除去せざるにあり
- 一、風化破砕し易き脆弱性の岩石地に於ては可成木伐其他林野産物搬出の爲め地盤の滑下を避けざるべからず
- 一、己に萌芽再生の力なき老樹林を皆伐して其の伐根を空しく腐朽に終らしめざる様に力むるにあり(以上)

一樹一村 小松吉次郎

松と云へば誰れも四時青々として常緑の木と思へども富士松、落羽松の如く冬期其葉を失ひ翌春新芽を出すものあり又葉の短き姫子松もあれば葉の至て長い「ヒマラヤ松」もあり針葉をなすは普通なれども落羽松は鳥の羽に似たり二葉は普通なれども五葉もあり一葉もあり其種類は實に多けれども何れも皆立派なる形をなして生長し其風姿の美

なること決して他樹の及ぶ所にあらず殊に東洋諸國にては松は千秋の緑濃かにして四時色を變へずよく嚴冬を凌ぎて霜雪に遇ふも其色益美に百年を重ねて愈榮ゆるを愛し木犀、厚皮香、竹柏、南天の上に立して庭園に植えられ其枝葉の榮枯は家運の盛衰を示すものとし或は門松に立て、一年の門出を祝し屈曲極りなきは盆栽にして腕大尙百年を評るあり或は婦女の節操高きを松の變りなき色にたとへて貴び一も二も目出度きことには松を用うるを常とす或は花鳥風月と共に我國詩歌の題目となりて盛に詠せらる又其訓の「待」に通ずるの故を以て才媛歌人の玩ぶこと多し古く万葉の時代にも

うめの花さきて散りなば我妹をこんか
又下りて小倉百人一首の中にも「まつとし聞かば」云々の句あり古今集時代に題詠の廣く行はれし時には松を詠すること更に多

住吉の峰の姫松人ならば
いくよかへしと問はましものを
明治聖代にも新年の歌會に巖上の松、社頭の松、雪中の松と云ふ御題の賜はりしを聞く、然るに歐米諸國には我松の如き美なるもの少く反て解の如きもの多く詩によまれたり獨乙國には黒松佛國には海岸松、北米には「リギダ」松等ありて我國の松に似たれども東西の人其賞玩する所自ら異りありて歐米人は松の美を知らざるもの如し嘗て「シユレー」氏が伊國「ビザノ」の附近「カシリン」の松林を逍遙して一詩を詠せり其意に曰く

吾等は波の泡立つ濱邊の松林に逍遙す風は最早其巢に返りて音もなく、ささやく波はわむりて靜かなり、雲は遠く旅路に

出でて曇りなく、まばゆき海面は微笑を湛えて迎ふるに似たり思へば我は天國の樂園にあるかと感じぬ

又「ウオーズ」氏が羅馬のモントマリオの松を詠みて曰く

此樹は飽くことなき斧の刃を逃れて今や尙永久に緑を湛えつゝあり嗚呼救はれたる松は光輝く蒼天の色と、雲の美と、故國の思ひと、消に行きし友と、夢と過ぎに昔の思とを浮べつゝ永久に變りなき「ウスター」の堂宇を凌ぎて昔時「ヒレシウス」峰より人目を引きし羅馬の全盛を覆ひて自ら獨千代の色を誇れる此松よ嗚呼

此の如く歌に詩に賞せらるゝの光榮は唯其形態の美と、數百年生存すること起因されども亦四圍の狀によりて異れり白砂青松てふ言葉は最もよく松の美を表せり而して我國至る所に花崗岩の噴出ありて松の生育に適し且つ益其美觀を鮮明にすされば我國絶景の勝地此木によりて飾らざるなま三景は云はずもがな須磨明石和歌浦の美を呈す其一樹にして人目を引くものは唐崎の松湖畔に茂りて八景の一となり泛見の松は安房國の名木にして花の松は奈良の古木見返りの松は豊公を止めしと聞く

終りに松は長壽を保つを以て紀念木として植えらるること多し寢覺臨川寺にも二本の紀念木あり日義村に義仲元服の松あり其他公園神社佛閣には戰勝紀念木として松を見ること多し生きては衆人に賞せられ枯れては棟梁の良材となり焼殺されては松烟となり墨となり高貴の居に接す松の生涯頼母しけれ、虎は死して皮を殘す松は死して廟堂の高き上り雲上月客に玩ばる、人はよく松の美を賞すれども之れに倣ふて身を立て名を上げる者幾何ぞ

拔萃

林業年中行事
一月 四方拜
二月 孝明天皇祭
三月 元始祭

一月 四方拜
二月 孝明天皇祭
三月 元始祭

一、前年に於ける各種外業に開關せる計算並製圖類を取纏め且諸帳簿及統計を整理すべし

二、播種用の種子を精撰し且其發芽量を檢し坪當播種量を定め置くべし

三、器具器械及諸道具類を取調べ其不足せるものは購入の手續をなし破損せるものは修理を加ふる等整理をなすべし

四、境界用其他各種事業上必要な標杭及苗圃用立札並苗木運送用の木札等を作るべし

五、年内を通じて氣温を檢測し且雨雪霜霰暴風洪水其他天候上の關係を記録し事業上の參考に資すべし

六、苗圃其他造林事業に使役すべき人夫招集の手續を爲すべし

一、霜柱 降雪及寒風等の爲め苗木の害せられざる様保護に注意すべし

二、雪風等の爲め霜除けの破損せるときは其程度直に修繕すべし

三、肥料を準備し豆糟油糟の如きは搗き碎きて粉末となし置くべし

四、播種用並日除用材料即ち糞、竹、杭、細葉の準備をなすべし

五、暖地に於ては本年苗圃とすべき土地を深く鋤返し寒風雨雪に曝らして土壤の分解を良くし潜伏せる害虫を殺すべし

造林
一、積雪なき地方に於ては新植豫定地の地拵(地明)をなすべく暖地に在ては可

成本月中に之を終了すべし

一、積雪なき地方に於ては野火に注意すべし特に造林地に於て然りとす

二、降雪多き地方に於ては本月より二月に亘り林内橋梁の除雪をなすべし

三、積雪の爲め立木竹の彎曲傾倒せるものを生じたる時は繩等を以て引起し之を保護すべし

四、年内を通じて油断なく盜伐及境界保護に注意すべし

五、四季共に油断なく有害動物の驅除に力むべし就中冬季積雪の爲め食物なき候に於て杉、扁柏、松類の造林地に兎及鹿等の害甚しく又松類、栗、櫟、其他の潤葉樹林に野鼠の害多きを以て特に之が豫防及驅除に注意すべし

六、積雪なき地方に於ては松毛蟲の幼蟲其他害蟲の卵を樹皮の割目及落葉苔蘚中に搜索して之を殺すべし

七、冬季間栗櫟柳及やまならし等を伐採して其幹に寄生せる天牛を殺し又は立木の儘錐を以て之を突き殺すべし

八、冬季間栗櫟毛蟲蠶毛虫やまかますてふ等の卵を樹幹の枝下或は凹所に發見して之を壓殺すべし

利
一、冬季伐木を行ふべし即ち東京附近にては前月より引續き薪炭材を伐採し秋田青森地方に於ては搬出上積雪を利用するの便あるにより前年十月頃より本月迄引續き盛に伐木造材をなすを常とせり秋田地方にては本月より雪櫃運搬を行ふ

二、竹木の伐採は仲秋より本月中旬迄を

好季節となす蓋し夏期に伐採したる竹材は最も蠹蝕の害に侵され易きも冬季に伐りたるものは其害甚だしく且五月頃に至る迄能く其緑色を保存し得るを以てなり

三、本月より二月上旬に亘り椎草原木として樅樅を伐採すべし

四、季節により又地方により自ら運搬の方法を異にすべしも四季を通じて運材事業を施行すべし

五、樹木の生長を始むるに至る迄は炭燒の好季節なり

六、復流及ばさ(薪)流を行ふ

七、枿を作る

八、澱粉製造及紙漉業をなす

九、樟腦を製す

雑
一、森林土木事は年内を通じて之を施行すべしも本月及二月は土地凍結する時期なるを以て可成之を見合せべし

二、造林人夫小屋の修繕をなすべし

三、谷川の最低水位を測定し置くべし

四、鷺類は一二月の頃に於て交尾し三月頃二三の卵子を産す

五、狐も一二月の頃に於て交尾し妊娠約六十日にして三四月頃分娩す其産仔數四五頭なり

内業
一、前月に記載せる内業は引續き之を行ひ本月中に取纏むるを要す

二、苗圃其他造林事業に使役すべき人夫招集の手續をなすべし

苗圃
一、寒地の苗圃にありては霜柱の爲脱け出でたる苗木を集め之を假植し置くべし

二、温暖なる地方に於ては苗圃地の凍結融解せるものを耕翻し根肥を施し以て播種移植の準備をなすべし

三、暖地の苗圃にありては落葉潤葉樹又

は松類の苗木を掘取りて假植し植付の準備をなすべし

四、遠隔の地へ送達すべき苗木を掘取り其根を潤潤なる水苔にて包むか又は糊狀の土水に漬し丁寧な荷造をなして輸送すべし但し土地凍結せる間は苗木の根を損傷するにより掘取を見合せべし

五、暖地の苗圃に在ては中旬より床換を始む

造林
一、積雪なき地方に於ては新植豫定地の地拵(地明)をなすべく暖地に在ては可

一、霜柱 降雪及寒風等の爲め苗木の害せられざる様保護に注意すべし

二、雪風等の爲め霜除けの破損せるときは其程度直に修繕すべし

三、肥料を準備し豆糟油糟の如きは搗き碎きて粉末となし置くべし

四、播種用並日除用材料即ち糞、竹、杭、細葉の準備をなすべし

五、暖地に於ては本年苗圃とすべき土地を深く鋤返し寒風雨雪に曝らして土壤の分解を良くし潜伏せる害虫を殺すべし

造林
一、積雪なき地方に於ては新植豫定地の地拵(地明)をなすべく暖地に在ては可

一、積雪なき地方に於ては野火に注意すべし特に造林地に於て然りとす

二、降雪多き地方に於ては本月より二月に亘り林内橋梁の除雪をなすべし

三、積雪の爲め立木竹の彎曲傾倒せるものを生じたる時は繩等を以て引起し之を保護すべし

四、年内を通じて油断なく盜伐及境界保護に注意すべし

五、四季共に油断なく有害動物の驅除に力むべし就中冬季積雪の爲め食物なき候に於て杉、扁柏、松類の造林地に兎及鹿等の害甚しく又松類、栗、櫟、其他の潤葉樹林に野鼠の害多きを以て特に之が豫防及驅除に注意すべし

六、積雪なき地方に於ては松毛蟲の幼蟲其他害蟲の卵を樹皮の割目及落葉苔蘚中に搜索して之を殺すべし

七、冬季間栗櫟柳及やまならし等を伐採して其幹に寄生せる天牛を殺し又は立木の儘錐を以て之を突き殺すべし

八、冬季間栗櫟毛蟲蠶毛虫やまかますてふ等の卵を樹幹の枝下或は凹所に發見して之を壓殺すべし

利
一、冬季伐木を行ふべし即ち東京附近にては前月より引續き薪炭材を伐採し秋田青森地方に於ては搬出上積雪を利用するの便あるにより前年十月頃より本月迄引續き盛に伐木造材をなすを常とせり秋田地方にては本月より雪櫃運搬を行ふ

二、竹木の伐採は仲秋より本月中旬迄を

一、引續き冬季伐木を行ふべし
 二、秋田青森地方に於ては本月に至り積雪益々固結するを以て盛に木伐の繰出しを行ふ
 三、降雪多き地方に於ては本月より三月に亘り深山の積雪固結して徒歩に便なるを以て此時期を利用して主伐間伐其他の實査をなすべし
 四、追々樟樹の落葉季節に向ふを以て之を採取して樟腦原料となすべき林地に在ては豫め地面を掃除し採取上の便を図るべし

一、椎茸乾燥室を修繕し乾燥用の器具を準備し置くべし
 二、狼は本月交尾し妊娠十三週間に於て分婉す其産仔數四五頭なり
 三、兎は毎年四回(稀に五回)即ち二月四月六月及九月の頃に於て交尾し妊娠三十日にして分婉し毎回三四頭の仔を産す

東京府下に於ける杉林
 害蟲驅除概況

(山林公報轉載)
 明治三十八年頃より東京府豊多摩郡外二郡に於ける杉林に一種の害蟲發生し之が驅除豫防に苦心せるも未奏功を見付ざるの遺憾とする所なりしが幸に同府農事試験場に於ける研究に依り害蟲の性質生育の經過及其潜伏季中に乘じ之を驅除せんとし被害各村に講習會を開き其經過状態及驅除豫防の方法等を知らしめ尙其實行及經費支出の方法等を協定し府郡主任者監督の下に各期日を決め其驅除を實行せり
 其驅除を實行せる杉林は十四箇所反別二町八反五畝歩にして捕獲蛹量七斗六升餘に及

べり而して害蟲の形態經過習性等左の如し
 杉の鋸蟬
 學名 *DohpP.N.M. Pannon' a.Sp.*
 種名 膜翅目 葉蟬科
 被害植物 杉、檜
 府下分布 豊多摩郡、北多摩郡、荏原郡

形態
 小形の葉蟬にして體軀は黒色を帯び頭部は大にして幅廣く胸部は隆起して堅く其中は頭部に均し翅は前後共に透明にして翅脈及縁紋は黒褐色を呈し翅面には最微の短毛を被れり脚は淡黄色なるも腿節及脛節の下半は黒く脛節の下短には二刺を生ず腹部は稍扁平にして長く雌の腹部は幅廣く共に雄より一層大にして尾端尖る雌虫は體長二分五六厘翅の開張五分七八厘雄虫は體長二分一二厘翅の開張四分三四厘内外なり卵 淡黄白色にして精圓形をなし微細にして下枝の葉面に一粒宛産附す
 幼虫 充分老熟したるものは體長六分前後に達し頭部黒色體軀は綠色を帯び圓筒形にして横皺多く第一節より第三節までの背面稍々黄褐色を呈す之の杉脂の皮膚を透して見ゆるものにして物に驚く時は頭部を上方に向け胸部より此脂を吐瀉す
 脚は胸脚三對腹脚八對を有す
 蛹 幼虫老熟するときは樹幹を下り土中一二寸の深さに入り長さ二分六七厘内外の褐色にして楕圓形をなせる粗繭を作り蓋して其儘越年し翌春蛹化す蛹は淡褐色にして體長二分三四厘内外なり
 被害状況 幼虫は五月上旬乃至中旬に孵化し出て杉葉を食害すれども其當時は未だ食餌少きが爲め被害も明かに認めざれども六月中旬頃より漸次食害を増し同下旬には甚しきものは古葉及幼樹皮は全郎食盡され唯

々に新葉のしく存在せしむるのみに至り虫は順次附の杉木に移轉して食害を加へ遂に枯死に至らしむるものなり而して此虫の被害甚しきは空氣の流通不良の杉林にして植付後四五年より三十四年位のものには少く植付當時のもの又は成木したるものには少なく殊に枝下の二間半乃至三間以上もあるものには殆んど被害を見ざるなり
 經過習性 年一回の發生をなすものにして幼虫は七月上旬乃至中旬に至り老熟して樹幹を降り土中一二寸の處に於て結繭し其内に蟄して其儘越冬し翌春四月上旬乃至中旬に至り蛹化し四月下旬乃至五月上旬に羽化し成虫となり杉葉に一粒宛産卵し十日内外にて孵化し幼虫となる幼虫は初め下枝の古葉を喰ひ漸次上部の枝に及ぼし遂には幼樹皮をも喰害すれども新芽新葉は常に残して喰せず食物の不足を告ぐる時は樹幹を降り附近にある杉樹に移轉し順次食害甚しきときは全く枯死に至らしむることあり
 驅除豫防法
 一、冬期農閑を利用して結繭を採集し殺すこと
 二、幼虫結繭の際には必ず樹幹を下るを以て之を捕殺するか又は根本の土壤を軟け結繭を容易ならしめ冬期に至り採集する事
 三、五月上旬中旬の頃孵化したる幼虫は下枝に集合せるを以て之を捕殺すること
 四、六月中旬より幼虫は樹幹を上下するを以て此際幹に杉葉を結び付け之を集めて捕殺すること
 五、除虫菊石鹼液或は石油乳劑二十倍液を噴霧器にて撒布すること

曲木椅子製作に關する
 實験報告 (山林公報抄華)
 (一) 曲木材料の曲る理由
 凡て木材は稅程度迄は挫折せしめずして容

易に灣曲せしむることを得るものなりと雖も此の如きは其灣曲の度合少くして味た吾人の目的とする用途に充つる能はず然れども今適當の手段を以て之を處理せば木材固有の性質を變化して灣曲屈撓を容易ならしむるに止まらず且割裂損傷せしめずして之れをなすを得べし力學上凡ち桿狀を成せる物体を灣曲せしむるに當り其灣曲凸面に向つては其纖維力延長せられ其凹面に向つては壓縮せらるべし而して此二種の作用は外部より中軸に進むに従ひ減少し中軸に於ては延長壓縮の兩作用を受けざる平衡状態の一層存すべし若し物体が對稱なる時は中軸即平衡層は其中央に存在し其灣曲後に於ても尙ほ其長さに變化を起さず曲木材料も亦此作用を受くるものなり即ち曲木用材料に毫も適當の補助手段を施さず自然の儘にて大なる力を加へ灣曲せしむる時は其凸面纖維延長木材固有の伸長限度を超越し其凸面に最近き部分に於て纖維の切斷並に組織の割裂を來すを免れず雖も其凹面の纖維は壓縮作用に依りて組織の緊縮を受け變状を呈するも凸面の如く甚だしからず故に椅子用木材を灣曲するに當りては其壓縮作用には充分耐へ得べきも其延長せらるる方面は僅少なる力に耐へ得るに過ぎず若し其外力の之に超越する時は木材は比較的速に纖維の切斷其他外見上の障害の生じ易きものとす然り而して前記の如く桿材彎曲に際し其彎曲を容易ならしめ且纖維の切斷又は組織の割裂を防ぐの手段として最重要なることは桿材を蒸氣にて蒸すこと及び帶金を桿材凸面に沿ふて緊張すること是なり即ち一は桿材に熱と水分とを與へて材質を柔軟ならしめて彎曲を容易にし一は彎曲の際桿材の中央に位せる平衡層を成る可く其凸面に近く移動せしめ若し出來得可くんば之れを

凸面に移して桿材の殆ど全部を壓縮して目的とする彎曲形狀を爲さしめんとするにあり
 (一) プナ 此材は春秋年輪の組織に粗密の差少なく之を蒸氣にて蒸せば韌性を増し年輪に沿ふて割裂すること稀なれども曲木用材としては稍脆弱にして割裂の虞ありイヌエンジュの如く安全ならず且其割裂の方向殆ど一定せず試に此材に眞直なる割目を入れんと欲し其纖維に平行に斧を下すも殆ど全く意の如くならず之れ單に木理の通直ならざるのみならず此材は纖維の方向に於ける強き比較的小に且纖維と平行なる方向に於て纖維相互の粘着力割合に弱きが爲めならん故に曲木用材としての「プナ」は材質最良好にして木理通直なるものを撰はざる可からず
 (二) イヌプナ 此材は韌性及割裂状態等略は前記プナに類似するも實験の成績に依ればプナ材此劣るの感なきに非ず
 (ハ) ケヤキ 材質堅硬なるも之を蒸す時は柔軟性を増し屈撓し易くプナに比して脆弱ならず割合に曲げ易し
 (ニ) シラベ及トイマツ 此等の材は桿の始堅からざれども導管發達せる木理其他割裂の模様等畧同様にして割合に曲げ易し
 (ホ) イヌエンジュ 此材は從來曲げ易きものと認められたるが如く實験に供したる桿材中最曲り易く其堅軟の程度と割裂の少きこととは能く曲木に恰適せり是柔軟性に富み彈性破壊兩限界の間隔大なる爲めなり又此材力割裂すれば彎曲凸面に於て其上層纖維先づ切斷し而して後本理と平行に割裂するを認む

(ト) トネリコ 此材を蒸氣にて蒸せば適度の堅さとなり且韌性に富み屈撓容易にして割裂の悞渺なく前記イヌエンジュに次ぎて成績良好なり
 (チ) シビ 韌性に乏しからず比較的曲げ易れども稍軟弱に過ぎ殆ど蒸氣時間の長短に係らず何れも同様に皺狀の折目を生ずることあり
 (リ) シラベ及トイマツ 此二種は材粗軟に過ぎ彎曲凹面の壓縮不均にして局部に急激なる曲目又は折目を生ずる故曲木の如く其用途上桿材の厚さ比較的大なるを要し且曲ぐるに大なる力を要する曲木に用ふることは能はず
 (三) 内部材と外邊材
 木材を曲ぐるに當り直接人力を用ふる時は其彎曲の難易に於ける僅少なる差違は之れを認むること頗る困難なれば内部及外邊材の比較を明にすること能はざりしも概して内部材は校節及其他の瑕瑾多く又外邊材は内部材より後年に成立せる部分なれば較多量の水分を含み韌性に富むを以て割裂すること少きものとなす若し乾燥材にして此等兩者に含有する水分に差なしとするも之れを蒸氣にて蒸すときは外邊材は較多量の水分を吸収すべく従つて大体に於て外邊材を以て内部材に勝れるものと見做し難きにあらず
 (四) 蒸したる材と煮たる材
 此兩方法は共に桿材に熱及水分を給し其韌性を増すを以て目的とし其効果亦著しき差違なきも蒸氣を用ふるものは其壓力を加減し而も熱度を高め得れども煮沸法にありては壓力は勿論温度もまた攝氏百度以上に上

昇せしむること能はず而して熱及び水分と
物性の關係未だ明瞭ならざれども若し攝
氏百度以上に於ては温度の上昇が猶ほ物性
増加に有効なるものとせば蒸法は蒸法より
此点に於て有利なるべし次に此両法中水分
を含有せしむる量は蒸沸に於て多きを常と
すれども蒸材は蒸材に比し事實上割裂する
こと却て多からざるを見れば含水量の多少
が靱性に及ぼす影響は熱の如く顯著ならざ
るが如し之に依り熱と水分とは相互に關連
して木材の靱性に作用し其影響の度は熱度
の多少に於て著しきものなるべく從て蒸し
たる材は効果比較的良好にして之に要する
時間に亦短かくして可なるもの、如し桿材
を蒸すに要する時間は蒸氣の壓力材桿の大
さ等に由り異なりと雖も椅子製作用の二寸
餘の角材には凡う一氣壓にて二十分以上一
時間を要し一時間以上に至るも其効果に大
差なきが如し

(五) 木を曲る法

先づ適當の大きに之を木取り之れに粗削を
施したる後蒸籠に入れ罐内の壓力の強弱及
ひ桿材の大小如何により二十分乃至一時間
後に之れを取り出し直に帶金を當て兩端を萬
力にて締付け其一端の萬力は螺子の裝置に
より帶金の緊張緩和を自在ならしむ斯くし
て豫め堅固なる臺に水平に固定したる型へ
例へば座輪の型)の一端に桿材の一端を帶
金を外側に向けて萬力にて固結し置き急激
に力を加へざる様徐々に曲げ行き更に用意
せる他の萬力を以て桿材を適當の位置毎に
其型に充分締付けたるものとす然るに凸面
壓縮は彎曲作用に伴はざる爲め曲るに從
ひ桿材の長さ帶金の長さより増長し兩端は
萬力にて固結するが故に次第に弓形を成す
に至り尚強ひて其儘之れを彎曲せんとせば
強大なる力を要するのみならず其壓縮力の

爲め却て四面を挫折し或は他に故障を生ず
る虞あるが故に其都度其一端に裝置せる萬
力の螺子を緩め帶金の緊張度を適當に加
減しつゝ桿材全部を曲け終り萬力にて止め
置くべし次に之れを其儘乾燥室に十時間乃
至一晝夜位乾燥すれば木材は能く其形狀を
保持すべし
以上は當試驗所にて考案せる椅子の座輪を
曲ぐる仕方にして尚ほ椅子の背掛を曲ぐる
には型の彎曲部頂点に於て桿材の中央を最
初に回結し型の兩端に向ひ前記の如くして
同時に曲げ進む仕組となせり若し桿材屈曲
の作業に適當の器械力を用ひなば最簡便
にして而も桿材に加はるる力に緩急の不平均
なく割裂を生ずること尠なるべし唯人
力に依て之れを爲す場合には其熱練と否と
により大に巧拙の差を生ずべきは明なり特
に彎曲の始點及終點は最も損傷を生じ易く
即ち其始に於ては萬力を以て帶金を桿材に
締付けるも緊張の度合適當なること難く其
曲りの終點に至るに際して帶金甚しく緊張
し桿材は内側に向つて弓形に張出で且時間
の経過と共に熱と水分とを蒸散して次第に
其靱性を減少する者なれば若し過て作業者
の手を緩むる等のことあらんか帶金の僅少
なる緩和の爲めに瞬間に木材に割裂を生ず
可し(以上)

文苑

年末から年始の感想

盲蛇生

今度の校友には時節柄定めしこんな問題が
澤山あるべし僕亦疊に做ひて片隅を埋むべ
く盲蛇が出懸たり一体世の中にはよくも泣
理漢の揃つて居たもので正月とさへ云へば
無關矢鱈に嬉しがり目出度がりて狂ひ廻は

るが甚だ其意を得るに苦む僕熟考ふるに何
も新年だからつて馬鹿が利巧になるでもな
し鼻の無蓋が西施に變するでもないれば子
供の豚犬が麒麟に化ける譯でもない殊に多
年執念くも僕の身に追隨して離れざる借金
なんか棒引處か利息を食つて益太つて來る
うれに氣候はどうかと云へば瑞氣も慶雲も
あつたものじやない益炬燵と首引の競技で
春風駘蕩なんか遠い長野ではない三四ヶ月
も向ふにござるうれに引換へ僕の形骸は混
々晝夜を含めず死海に向つて流れ行き時に
刻々其距離を短縮しつゝあるではないか猶
又た負けにだ子供の嗜着はどうかするのあの
七種はなんとするの親戚の歳暮だ醫者の藥
禮だ煤も拂へ餅も掲げ門松た床飾りださう
の五月蠅い事面倒臭い事……これでも婆
の人間さといふ者は嬉かると思ふであら
うか目出度かるべき謂れがあらうか！
マア愚痴や理屈は善い加減にしてこの仲裁
人に任せようかかうか田作煮豆の準備も出
來てイザ年取と膝に直つてもまだ掛取の提
灯は遠慮なく腦底まで照して襲撃し來る一
飯に三たび嘔吐を吐いて債鬼を迎へる物數寄
も珍妙だ嘲笑い事ではない忌々しい
かくて本願寺の百八梵僧を撞き初めた頃氣
倦み体疲れて茹菜の如き身を臥床に横へい
つしか華背ならぬ惡魔に襲はるゝ夢路を辿
つて居た所で隣家の雞が常には溢はた濁つ
つて居た所が今朝に限つて勇ましく僕の
た力ない鳴音が今朝これが抑挫訝の始り頭を擡
夢を破つたサアこれが抑挫訝の始り頭を擡
りて邊りを見廻せば室内の空氣が何とな
くすがくしい山神の若水汲む音も何とな
く牙ええしい子女の勝手に働く身振もど
ことなく活躍してゐるいつも起き不精の僕
も珍しく我が立ち上つた心も軽し身も輕
し昨の惰けた居候根性は今は翻て一軍を叱
叱するの猛將となつた旭日は軒頭に紅に松

竹は門松に綠なり青空に靡く國旗は四海を
睥睨するか如く軒端に嘯る鳥雀は君が八千
代を壽くに似たり賀客は微塵を帯び笑を漂
へて悠揚徘徊し兒女は紙鳶に羽子に嬉々庭
上に戯る山笑ひ水笑ひ人も笑ひ丈も笑ひ描
も杓子も照々雍々天地萬象皆笑の浪に喰
す僕亦哄然として大に笑ふ既にして獨自ら
恠む昨の目出度からざりしを嘆きしもの今
又此の如し年越の宿醉尙ほ愈々さるか除夜
の夢未だ覺めざるか狐狸我を魅みしにはあ
らざるか催眠術我を弄ぶるにはあらざるか
と時に天上幽に聲あり告げて曰く汝恠む勿
れ唯いつしか身は世海の渦中に捲き込まれ
しにあるのみ其哄然として笑ふものは眞に
心の樂しきを表白せるものにあらずや曰く
然り然れども昨來目出度からざりしもの今
尙依然として一も艾除せるものあるなし唯
其何が故に樂しきかと知らざるなりと言未
だ終らざるに汝下恩尙且悟らざるか唯樂し
きが故に樂しきのみと其聲天地も驚るも許
にして去つて復た其に言はず僕恍然たるも
の良久し既にして豁然として悟る所あり鬼
角浮世は理屈ばかりにては通らざるなり且
飛行機に乗りて中空に舞ひ紅塵萬丈の下界
を余所に瞰下する如きは變り者の骨頂と謂
ふべし只々漂々泛々世と共に移りシヤツツ
て處世の妙計とす屈原も偏屈原なり伯夷も
馬鹿なり叔齊も頓問なり好漢漁夫獨談する
に足ると筋を擧げ祝して曰く馬鹿の繼縁は
脱き棄てたり利巧の新衣を纏ひたり嗚呼嬉
しい哉目出度哉

だ寄宿舎も何だか馬鹿によいと思ふ事もある
が嫌だと思ふ時は一刻も居たくなくなる
天井には〇小屋と樂書されてある戸窓は傷
み疊は切れて居る馬鹿に薄暗い時々風と共に
に變なにはびがして來るしよくもこんな家
に住んで居たものだこんな家でも讚美する
事もあるのだが嗚今日こは嫌だ全く嫌だ
早速逃げ出して下宿屋へと宿を移した尤も
休みにもなつたからだアこれで全く氣樂
だ
十二月二十六日 今日こはうんと朝寝坊
をやるうと昨夜から考へて寝たのだが今朝
早く伺つてたいた小鳥に呼び起された何だ
か腹立たしい様でまた嬉しい様だ一日中何
も仕事がないこれから毎日寝て暮す積りだ
ア小鳥はよく囀つる
十二月二十七日 今日朝から何だか世の
中が馬鹿々々しい様な氣がする千里眼とか
念射とか云ふ者が無暗と出て來る學問も糞
も必要なくなる様な氣がする此間の學期試
験に失敗したから一つ氣まぐれ歌を作つて
やうう創作は面倒だから南歌だ
勝寫版の文字不明利用測量難(百人一首こ
れやこの讀み手書き手にわかれては
知るも知らぬも蠟燭の下
三角雞(天の原)
あたまをばふりさげ見れどさすがにも
代數難(今來ん)
三角術のむづかしきかな
今解けんと思ひしばかりにまごつきて
ありたけの式を並べつるかな
算術開平開難(久方の)
ひらきかたひらきかねたるうのために
七十の点なく丁の取るらん

英語難(ほととぎす)
英吉利語書きつる紙をながむれば
經理難(思ひわび)
思ひわびても試験のあるものを
憂に堪へぬは經理なりけり
幾何學難(ふくからに)
きくからに青く顔付なりぬれば
うへ幾何學をむづかしと云らん
漢文難(やまさと)
からぶみはいつも若し憂りけり
一つもよくは出來ぬと思へば
今日は此の位にして外のは何れまた呪ふこ
ととす
十二月三十一日 今日は大晦日町を一回り
いたさう仲々忙がし相だ債鬼商人金持は殊
に忙がしい様だ心配相な顔付の人が澤山通
る僕も随分心配ある人間だが心配したつて
僕の現今の境遇では仕方がないが先づ借金
取りは驚の聲として置く一文なきから買
物も何も出來ない兎に角年を一つ取る事と
しよう
四十四年一月元旦 今日は大正月だ相だ變
恍惚面を洗つて居たら何處かのたさんどん
とた鍋ごんがた目出度うせ云つて居た禮服
の人が往來する僕もた雜費を祝つて學校へ
行つたられから五六軒年始に行つた木曾福
島町の習慣として軒前に掛けてある函中に
名刺を投げ込んで來ればよいのだれでも
道でござも遣へば目出度う位のことはいふ
何だか妙な氣がする新年に目出度う早く歸
つてお呉れと言はれる様な氣がするどうだ
ろうこれより早朝日の出を待つて一聲に
目出度うといつて済ましたら下駄や着物が
傷ます名刺不要甚だ經濟だと思ふが眞の禮
とか虚禮とか八ヶ問敷事は御免だ新年早々

冬籠日記

十二月二十五日 今日から愈學校はた休み

生意氣な事と云ふ叱られるから歸つて来て親戚知己朋友へ賀状を出した。昔から元旦にやつたことは一年中やるものだといつて居る一つ懲らつて金を遣はず食はず飲まずに居たら年中其だ得たらう馬鹿なことを言つたものだ。

一月二日 去年頃は歌留多をやるのがよいとか悪いとか名士學者までが八ヶ間敷いつて居た様だが、そんな事を云ふ丈が野暮だと思ふ話だ。阿呆だ世の中にある以上はやつてもよいのだ。悪いものなら存在せしめねばよいのだ。悪いと云ふ奴に問ふがなせ存在せしめるのだ。返事が出来まい充分注意監督してやるて見給へ高尙にして趣味ある遊びであると思ふ歌留多をやるに歌の意味が何ぞか悪いのがあるとか言つて居るが或は悪いのがあるかも知れぬ然しそんな意味なんか考へて居たら直他人に取られて仕舞ふらうな馬鹿な奴があるものか。敗ける事の好きな奴は人間であるまい。こんな事を考へて居る時に君から手紙が来た。今夜歌留多會を催すから来て呉れとの事だ。これは嬉しいうんややつてやろう、やかと夜になつた。同人と三人連で出掛け、御免下さいいよいよあつたり玉へや失敬とばかりに座敷へ通るといよいよ居る中に出生地の話が出た。詞へて見たら頗る面白く、君が信濃江君佐渡僕が越後君能登君美濃君も美濃君羽前其外は弟妹君のみだ。六ヶ國の連合だ。此六ヶ國の人が一堂に會して歌留多を取るのだ。意味深き興味ある事。一入である。籤によつて組と讀み手とを定め、君が讀むて源平の戦がはしまつた。聲爽かにからを一枚よむからには、

鯨吹ゆる玄海灘を過ぎ行けば
ゴビの沙漠に月宿らん

と詠めば
兩軍の戦息を呑んで手ぐすね引いて待つて居る讀手は札を切り返して一枚
きり／＼と鳴くや霜夜のさむしろに
衣かたしきひどりかも寝ん
讀むか讀まぬのに早やハイと掛け聲勇まし
く札は飛んだ或は「ハイありました」と云ふ人もある手際よく實に鮮かだ中には狼狽する人もある勇む人熱する人次第に激戦となり「吹くからに」によりて勝負は決せられた。源軍の戦士あはれや玉の顔に墨黒々と片髯か生へた殊に姫達の髯が可笑い次に平軍破れ激戦回数む所を知らず區君かあ様に汗粉の御馳走をすすめられたので一休して御馳走になつた。姫達の口は馬鹿に小さいこの時た母ア様は黒白の顔を見て氣の毒に思はれた白粉を塗ることにした。言はれるので一回やつて見たところか今度は姫達は打ち負かされて塗られても平氣だのでからは止めにした。

からから讀むから諸人心せよ
パンカラ姿でハイカラに取れ
朗かに讀み上げられ數回戦は續けられた。其勝負毎に墨を塗るので大騒ぎだ皆十分の歡を盡して閉會をしたのは十二時を過ぎる二時余であつた。此時た母ア様は茶菓を御馳走して呉れたので遠慮なしに馳走になりながら顔を見合せて批評を初めた。君は五回ばかり塗り塗られて黒熊のやうだ。君は七回ばかり悪魔拂ひの様だ。君は八回許り劉備が爆男でもやつた様だ。君は兩髯がピンとしてガイゼルの様だ。君は五回ばかりで鍛冶屋の老爺の様だ。君は四回はかりで架装の老爺が炭焼きをした様だ。君は四回はかりで静御前が松煙製開始と云ふ姿。君は墨は額に一文字漢時代の罪人の様だ。僕は

白粉は二回だが墨は額に位星を一回貰つたのみ。辻堂の隅に居る地蔵様の様だ。人は云ふが僕には不明だ。何でも僕が一番よいとして置くやがて迎人と一所に厚く禮を述べて嬉しく歸つた。學校は休んだウツと眠ろう。

小品二題 曲美

若水 曲美
曉のみ空には光りの弱い星が瞬たいてゐる。新玉の年の若水くまんと釣瓶たぐれば静かなあたりから／＼と響いた。なみ／＼と汲んだ水晶のような水……真珠の玉がはつり／＼と、紅とやがてしめめんの雲ほんのりと、紅となり紫と變りて山鳥の聲……此處……彼處……

月夜 同
雲なく高き夕べの空は湖水のように澄んでゐる。呀々とした月は咲き誇つてゐる。老梅の枝に懸つてゐる時々よ吹く風に送られる清香に恍惚とした。遠くの野も、山も、近くの森も、丘も、いさ、小川も、月の光りは解けて淡く水銀の色彩の底に漂はされてゐる。うた

元旦 福田 曲美
軟かい朝日は松の葉越しに障子に一面にさして月影のように溶けて流れてゐる。私の胸に新しい希望が洋々として漲つてゐる。障子を開けて椽側に出ると、今まで庭の南天に唄いてゐた二三羽の雀が驚かされてパット飛び去つて隣の柿の木に喧しく鳴いてゐる。

遠く加賀と能登との境の賣達山は峨々として雪の綿帽子を被つて初空に響いてゐる。近く邑知湖の水は蘇漫として鏡を砥ぎ、肩丈山は屏風を立て様々に連らなつてゐる、其

の籠の枯れ蘆の邊りを鶴は群をなして遊んでゐる、私は何が温い手に抱かれて蒸籠の中にでも入れられるやうな心地がした。折りから桔槔の軋る音が吾れに歸つた、隣りの美ねちやんや向への久坊が學校へゆく。「が年の始め」と歌つてゆくのは手に取るように開えて却つて閑靜の趣がある。私は美しい初春の景色を胸に描いて室へ歸ると床の間にはにこりとした露も滴たる半開の福壽草が私を待つものゝやうであつた。一家團樂してた難を祝ふとき威嚴ある父の顔と莞爾とした母の顔を見るとき歡喜の聲は心の底から泉のように湧いて食卓を圍むやうであつた。

日はもう鎮守の森の上のぼつた、私は年邁りに家を出た。家毎に立つ松竹は千代の緑の色添へて旭日に輝く日の御旗はうよ吹く風にヒラ／＼と翻つてゐる、私は霜解けのした悪い道をトホ／＼と歩んだ、行き逢ふ紳士の顔にも田吾作にも喜悅の色が溢れてゐる。私は家毎に格子戸を開けて「明けまして新年目出度」と云のがわいも耻かしかつた、年始めも「こゝ」にして家へ歸つたら友達がもう家々に洋燈が點もされた。私は机に凭つて「ゆく川のなかれは絶えし」の方丈記を思ひだして變りゆく人と住家の有様を思ひだした。駒の脚掻は早く私は十九の春を迎へた、花を手折り蝶を追ひは西に落つるを知らずに遊んだ。白瀬山は依然としてゐる。暑い盛りには水泳ざし、草花を摘んだ飯山河畔、河水はとこしへに清く流れてゐる。然かし私の若き時代は永久に歸らぬ……

何處からか歌留多取る聲がゆるく流れてきた(石川縣羽咋郡飯山の故郷にて)

歌帖より 福田 曲美
病院のベツトに眠るわが姉の顔青白く宵の月照る
徒然に歌など讀めば涙ぐむ癖とはなりぬ十九の我よ
病葉の散る音寂し一人ゐてくれゆく丘に君を待つとき

寒月照梅花
さゆる夜の月の光りに照らされて雪かどまかふ梅の初花
雪のうちに早咲き初めし梅が枝を寒くも照らす月の影かな
全上 林子

流れる月の光をまことにうけてほ／＼えみ立てる梅の氣高き降りつめる雪をわしわけて咲き出してし花の香高し月夜の梅は 軒

折にふれて 町人は初夜よりいねて谷川のながれ一筋月にふけゆく
軒先に狸つるせる山の町 今日も吹雪にくれてゆくかな
山の町雪にうもるゆふぐれをかすかに馬車は笛ふきて來ぬ
さびしさに堪へてひこり大雪のみだれて來る山邊にがすみ天雲は低くきらひてま木立てる
荒山くらくたは雪ながる 安井 正夫
寒月照梅花 月影のさゆるゆふべも梅の花
にはふかざりば春心地して

學年生二十六名は征矢野教師引率の下に日義村附近に於て發火演習を行ひ四時歸校

○川崎助手轉任 本校卒業後二ヶ年間助手として本校に勤務せられし川崎本雄氏は此度縣下高井郡立農林學校助教論に榮轉せられ十二月十日出發赴任の途に上らる

○擊劍大會 十二月十二日午後一時松本の劍士正木勝氏來福に就き福嶋警察署發起となり本校雨天体操場に於て擊劍試合を催し本校生徒も組合の中に入り正木師審判の下に勝負を決して全師より指導を受け四時頃散會せり

○學期試驗 十二月十二日開始廿一日結了廿四日成績發表せられたり

○本多博士來校 十二月十三日林學博士本多靜六氏來校午後一時より有益なる講話あり詳細は追て記載すべし

○冬季實習 學期試驗終了後二日間裏山演習林に於て炭燒の實習をなす例に依て積雪中の作業頗る困難を極めたり

○終業式 十二月廿四日早朝より本校舎大掃除を施行し十時講堂に於て終了式舉行校長の訓誡歸省中の注意等あり十一時閉式

○四方拜 四十四年の元旦在福島の職員生徒講堂に參集勅語の捧讀君が代の合唱あり來賓として大澤縣會議員參列せり

○第三學期始業式 一月十九日午前十時舉行校長は新學期の劈頭に於て益々向上發展すべきを希望し訓戒せられ十一時終了

雜報

學校近況 藤田 生
○發火演習 十二月八日午後二時より第三

寄宿舎便り

鐵丸 記者

新年の御慶目出度申納め候併せて客年中の御厚情を謝し奉り候尙本年も相變らず御愛顧の程願上候、例の通り年末年始の寄宿舎を御通信申上候來年の事を云へば鬼が笑ふと申し候へば去年の事を云へば鬼が泣くかも知れず候、俗諺にも泣いて暮らすも五年笑ふて暮すも五十年心一つの置き處と申し候へば泣くも笑ふも鬼のみかは勝手に自分の都合よくて他人には迷惑をかくる事なき暮し方が最もよきかと存せられ候、うこで私などは俗諺の通り笑ふて暮す方に賛成に御座候、然し寄宿舎生活などは兎角自分勝手に参り申さず候、私なども時には讚美し時には呪咀する事も有之候、こゝが人間感情の動物たる所以にて心を一つ所に置き難き故かとも存せられ候俗諺にまゝにならぬとを櫃を投げりやうこあたりはまゝだらけ(まゝばかりの意)と云ふ事も有之候、これに依つて見るとどうしても心の置き所の世とか種々な御説を拜聴仕り候節は心の置き處もぐらつく事有之候、先づ、なるべくは笑ふて暮し度き心得に候、あまり自分勝手な事のみ申上失禮仕り候、然し寄宿舎も人間の集りに御座候へば、これとたいした變りは無之様子に御座候先づ去年の續きより申上候へば去年の十二月より次第に寒氣強く相成候間頗る閉口に御座候、十二月には斯界の泰斗本多林學博士御來舎相成候第二學期の試験には皆奮闘仕り候此難關を通過する時の辛苦は箱根嶺を超へんとし雪深うして歩になやみ寒風は肌骨に透みて五体凍るの苦みに比せらるべく候此の苦み

は十三日より二十一日迄續き申候此二十一日の夜は頗る安樂に眠り申候二十二日と二十三日とは例のメンバ辨當を持參にて實習に出掛け申候雪を踏んでメンバ辨當を持つて出かける姿は百鬼夜行ならで晝行の如く或は西洋乞食の行列とも疑へば疑がはれ申候然し皆至つて眞面目にて地拵へやら製炭やらうれん、勉勵實習いたし申候うんと働いて彼のメンバ辨當を開く時あまり悪しき物には無之云ふに云はれぬ味有之候卒業生諸君等も愚はるゝ事と存せられ候、寒氣強かりし爲め私は足指の爪を一枚損じ申候二十三日の夜は大々的忘年會有之候會場は西舎の樓上に御座候午後六時舎監先生の御臨席と舎生一同席に着くや炊事委員總代の挨拶に依て會は開かれ申候御馳走には赤飯あり鮮魚あり(瀟車の御蔭)よろ昆布あり密柑あり如何に大食官の大家にても平らげ盡するは不可能の程に候ひし腹はふくれ元氣は溢れ申候處唱歌は起り笑聲亦湧くが如く或は滑稽を演じ歡談盡くる處を知らざる有様に候然るに又も密柑は配分せられ申候益々賑ひ賑なる時突如場中に飛び出でし六名の炊事委員は高く積み置きし密柑箱の蓋を撒すと見る間に密柑の雨は降り出たし申候雪礫黄金の花なら眞平御免に御座候へ共密柑の雨なら大好物ござんなれと許りに飛び出だし這ひ廻り或はキャッチの如く懐中一抔拾ひ取り申し候拾ひし密柑もてチツチボ、チャケンボイは始まり申し候而して歡をつくして散會せしは午後八時に候因に本會へ校長閣下の密柑五箱を始とし大方の御寄贈に預り難有御禮申し上候、又本會に常校先生御一同を御招待申し上候へ其御用務の爲めに御來臨なかりしは遺憾に御座候、大掃除は二十四日早朝行はれ申し候之れを終りて午前十時終業式は行はれ申し候

候式後直に試験成績の發表有之候喜ぶ人あるかと思へば悲しむ者も有之候各其感を異にするは是非もなき事と存じ候式は終れり成績は見たりいざさらばと直に吾故郷に歸り行き指折り數へて待ちまやる吾父母の喜び給ふ御顔を拜せんものと共々に皆土産求めて喜ばしげに中央線の便をかりて家路に着く者多々有之候、瀟車の都合により又は御土産や仕度の都合にて矢の如き歸心を抑へて一夜寄宿に假寢の夢を結ぶ事とせる人も有之候此故に包み切れぬ嬉しさに眠り能はぬ人或有は早や寤て故里の人と語り人も有之候又寂しくて眠れぬ人も見受けられ申候、翌日二十五日早朝記者が目醒まし申候、翌日福島に居殘る同人三人のみ他はすべて夜の明けね間に歸り行き申候、何だか大風の後の様にて感せられ候、扱四十三年の寄宿舎生活も之にて一段落を告げ後は空屋と相成申し候此度は此の位といたし、あとは次號に可申上候以上

卒業生諸君雜誌費領收報告

- 金三十八錢 寺尾敬治君、金五拾錢 宮川榮三君、金三拾六錢 嶽野利雄君、三拾六錢 松澤萬吉君、壹圓 小山田喜重郎君、三拾八錢 山下義一君、以上諸君は振替口座にて合せて御送金の處手數料として拾四錢を要し候間右御了知を乞ふ
- 三拾六錢 宛原田義治君、上條嘉一君、木村鐵次郎君、武久貞一君、奥原吉右衛門君、鶴殿正雄君、小池金一君、和田宗吉君、岡田彌兵衛君、松井定道君、千村重喜君、小池新吾君、宮澤清輔君、北川信美君、中澤揚君、松嶋九平君、五拾錢 柳澤熊治君、壹圓 橫山義人君、三十七錢 倉科浦一郎君、壹圓 五拾錢 高樋博君、三拾七錢 金田美行君、壹圓 五拾錢 宮崎清太郎君、五拾錢 松本清太郎君